

# 平成 23 年度 (2011 年度) セタシジミ資源概況調査

石崎 大介・幡野 真隆

## 1. 目的

近年、セタシジミの漁獲量は 100 トンを下回っており、セタシジミ資源の現状とその動向を把握し、適正な資源管理や効果的な栽培漁業推進を行う必要がある。その基礎資料を得るため、1997 年より産卵期前にあたる 5~7 月に実際の漁船漁具を用いて調査を行っている。

## 2. 方法

2011 年 6 月 1 日および 3 日に琵琶湖北湖のセタシジミ主要 7 漁場(表 1)を含む 19 漁場において、実際のシジミ漁業で用いられる貝桁網(開口幅約 140 cm、網目 3 cm)を用いて調査した。調査は毎年同じ漁業者に依頼している。各漁場において 1 分間ないし 2 分間曳網し、採捕したセタシジミの個体数および重量を記録した。主要 7 漁場については 3 回曳網し、全個体の殻長も測定した。そして、GPS の軌跡記録から曳網面積を求め、単位面積あたりの採捕量を計算し、生息密度とした。

## 3. 結果

主要漁場以外の生息密度は針江、高島、近江舞子の漁場でそれぞれ 3.09、4.19、3.10 個体/m<sup>2</sup>と高く、菖蒲と新海の漁場ではそれぞれ 0.03、0.01 個体/m<sup>2</sup>と低かった(表 1)。

主要漁場の生息密度は平均 1.92 個体/m<sup>2</sup>であり 2009 年の 0.51 個体/m<sup>2</sup>から 4 倍近く増加した(図 1)。磯や沖島周辺の漁場では生息密度が増加し、特に磯漁場の増加が著しいが、今西、長浜、松原漁場では生息密度が低下し、特に松原漁場は 0.28 個体/m<sup>2</sup>と極めて低い状況となっている(図 2)。

主要漁場の平均生息密度の増加から、資源が回復傾向にあることが示唆され、殻長規制の他、燃油高による漁獲努力量の低下等が要因と考えられる。しかし、1997 年から現在ま

表1 各調査地点におけるシジミの生息密度(主要漁場は平均)

地点	個体数	曳網面積(m <sup>2</sup> )	密度(個体/m <sup>2</sup> )
菖蒲	3	108	0.03
牧	245	275	0.89
長命寺	387	334	1.16
沖島南西	651	341	1.90 (0.27)
沖島西	822	339	2.42 (0.16)
沖島東	154	153	1.04 (0.42)
新海	3	308	0.01
柳川	119	304	0.39
石寺	630	311	2.03
八坂	26	128	0.20
松原	92	324	0.28 (0.15)
磯	812	217	3.71 (1.04)
長浜	273	276	0.99 (0.15)
今西	1089	352	3.13 (0.81)
海津	34	135	0.25
針江	494	160	3.09
鴨川	142	186	0.76
高島	555	132	4.19
近江舞子	321	104	3.10

( )内は殻長 18 mm 以上の生息密度は主要漁場

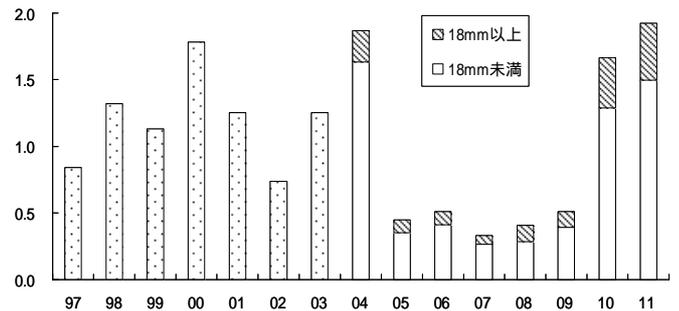


図1 主要漁場におけるシジミの生息密度の推移

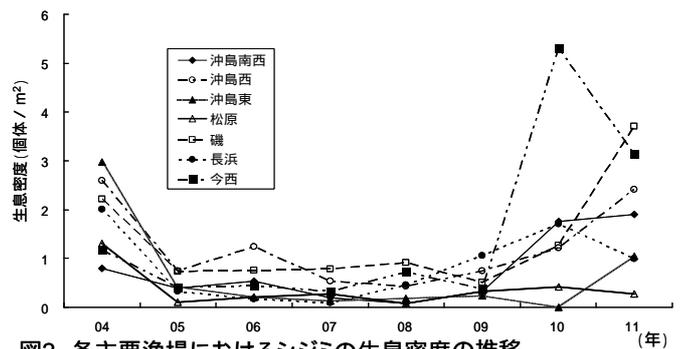


図2 各主要漁場におけるシジミの生息密度の推移

で見られるような変動の一部である可能性もあり、今後の資源動向を注視しつつ、引き続き資源状況のモニタリングが必要である。